
awareness

北原 梨花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

awareness

【Nコード】

N9884C

【作者名】

北原 梨花

【あらすじ】

とある人の数時間。何故かイライラして言い訳して、それでも続けていくのだけど。揺れ動くのは、それでも抗いたいと思う気持ちがあるからなのか。

横浜。

年末、いやクリスマス。辺りは綺麗なイルミネーションに飾られて、ナナメになってる私には目障りだけど。

(別に、クリスマスが嫌いなわけじゃないけどね…)

駅前の東急ホテルの前は待ち合わせだろう人でいっぱい、私はその中で時間を潰す。

年と不釣り合いな、けれども見栄に相応なブランドのバッグをあさって煙草を点けた。

見上げれば曇天の夜空。

(あー…もう…)

仕事に行かなきゃ。

やだな。

こんな日に客なんてこないし。
でもな。

細切れの言い訳はどんどん自分を歪ませる。

別に仕事も嫌じゃない。ただ今日は気分が乗らないだけだ。もう既に出勤時間を30分回っている。

時間が過ぎれば過ぎるほど行きづらくなり、規定の就業時間中はなんだか落ち着かなくて、結局休みだ、と気が楽になるのは終業の時間だと、判っていても、どうして休んでしまうのか。

(…まあ、いいか…)

ふと右からのイルミネーションの反射が陰り、目を向けると誰かが鞆をあさっている。同じように煙草でも吸うのだろぅと思って首を戻した時に、声かけられる。

「すみません、よかつたらこれから」

声で男だろうと思う。年も背格好も判らず、ただ今でも鞆に手を入れたままなのが滑稽なその男は無性に私の加虐欲求を煽る。

「ーは？ 何ですか」

「あ、いや…すみませんじゃあ」

確かに嘲笑を強調した声音だったが、たった一言だ。そのたった一言でそそくさと鞆を持ち直して立ち去る男に無性に呆れて、もう何本目か判らない煙草に火を点けた。

（何がこれからどうやったらすみませんになるんだか）

ーうるさい。

ココウルサイ。

（早く移動しなくちゃ、早くどこかいかなくちゃ、早く）

息が苦しくなって、それは気のせいかもしれないけれど、少し飲みすぎた時の感じに似ている。ものは目に映るけど認識できなくて音は耳に聞こえるけど意味をなさない。

私は何かに追い立てられるように足を早めた。地下鉄の改札はすぐそこだ。

30分も乗ればー…。

ーそして私はまた立っている。

いつ休みの連絡を入れたのかはつきりしないけれど、履歴には電話をかけた形跡がある。

ぼんやりと携帯をみながらアドレス帳をスクロールする。

ふと止まる指。

薄い桜色に塗った爪の先で軽くボタンをひっかく。少しの時間そうしている。

（お兄ちゃん）

今何してる？ クリスマスだし、彼女と一緒にだろうな。電話しても出ないだろうな。

不意に泣きそうになる。

本当は泣く理由などないのに。わざとらしく上を向き、慣れた動作で指を走らせる。見なくても判る、自分がどこにダイアルしているのか。

――呼び出し音。

「――おう、お前か。今何してんだ？」

「あざみ野ー。そっちこそ何してんの？」

「これから雀荘行くんだよ、お前も来いよ」

「やだよー、どーせ厚木でしょ？ 遠いもん。ごめん、またかけるわ」

いつもの声。彼は私を否定しない。肯定もしない。

「――あー、お前あれか、またなんか落ち込んでんだべ。明日うち来いよ」

私は軽く笑う。でも嬉しい。毎回同じ台詞なのが嬉しい。

「ありがと。暇だったらね」

「おう、じゃあな、なんかあったら電話しろよ」

「ありがと」

最後にもう一度お礼を言って電話を切る。

(…さて…)

かけるべき相手にかけないとね、と頭に過り、それからなんでもなんなふうに思うのか少しの疑問を感じる。別に意味などないのだから。ただ、本当にただ少し私が歪んでいるだけだ。

呼び出し音がして、声が応える。

「終わったの？ 早いね」

「サボっちゃった」

いつから電話の始まりに名前を言わないでもよくなったんだろう。勝手にディスプレイされる、勝手に登録された名前。

「そうか、今どこ？」

「駅」

「じゃあ待ってて、すぐ行くから」

待ってる、と言って切った携帯を眺める。履歴を繰る。

―誰だこれは。

今話してた相手は誰？ こんな名前の人だっけ？

”呼び名なんて、私だって判ればいいよ”

自分でかけた呪縛じゃないの？

背にした柱に張られた広告を見ると、プラスチックのカバーに覆われたそれに写るのは歪んだ人影。素直に落ちる髪だけが何故かまっすぐで、他は水の中から見ているように歪んでいる。

…足音が近づく。多分彼だろう。

「ー、お待たせ」

「あ、来たー。こっちこそごめんね、サボって急に予定早めちゃって」

「ーは、頑張ってるし。たまにはいいと思うよ」

顔を見てしまえばこっちのものだ。誰だか、なんて考える必要はない。

ずっと横に並び、彼が来た方へ歩き出す。顔が笑っているのが判る。

(…やっぱり安心するんだ)

例え呼ばれた名前が私の名前じゃなくても。名前を呼んでと言えなくても。

ーそして。

それでもやっぱり、明日になれば厚木へ行き、明後日になればお兄ちゃんに電話をかけるのだろう。

そしていつか、この安全な場所を手放すのだろう。この、優しいが優柔不断な隠れ家を放棄し、次の場所を探すのだろう。

ここにいれば雑音は聞こえず、私は庇護してもらえるけれど、それでも、やっぱり。

- f i n .

（後書き）

初投稿です。数年前のデータをちよつと改変してみましたけど、どう読み返しても暗澹とします…。

初めて自分以外の方の目に触れるものなのですが、相当緊張しますね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9884c/>

awareness

2010年12月29日02時34分発行